九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

カント「純粋理性批判」における人間の基本構造

上田, 富美子
九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

https://doi.org/10.15017/206

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 17, pp.57-67, 1990-03-05. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

カント「純粋理性批判」における人間の基本構造

上　田　富美子

Die Fundamentale Struktur des Menschen in Kants Kritik der reinen Vernunft

Fumiko Ueda

偶然のことから私は最近、カントについて書かれた一つの小冊子と出会った。[1] ソ連の学者の手になるそれは、しかしながらまことに刺激的なものであった。ドストエフスキーの小説「カラマーゾフの兄弟」の父親殺しの真犯人探しの有力な手がかりとして、そこにはカント「純粋理性批判」「弁証論」中の「アンチノミー」（二律背反）が援用される。いや事態はそれ以上であり、著者はこの高名な小説家の代表作「カラマーゾフの兄弟」は、カント「アンチノミー」のパラフレーズにすぎないとさえ言い出しかねない勢いなのである。推理小説もどきにその証拠固めは着々と行われ、読者はみごとに作者の目ざすところへと導かれてゆく。したがって著者にとっては、ドストエフスキーが、カント「純粋理性批判」を読んでいたかどうかを問題にすることさえほとんど無意味であったと言える。なぜならそれは余りにも自明なことであったのだから。[2]

しかしながら、この意表を突く著者ゴロソフケル氏の着想と説得力ある論述の運びはつよい喚起力となって、私を再び「純粋理性批判」へと、中でも今まで余り留意しなかった「弁証論」へと向わせることになった。以下はそのささやかな試みの一端である。

＊九州大学医療技術短期大学部一般教育

1

ところでカント「純粋理性批判」の中心的主張が「弁証論」の中に見出せるかといえば、それは誰しも認めがたいところであろう。カントはイギリス経験論、なかんずくヒュームから多大の刺激を受け「純粋理性批判」を著わすに至ったことを告白しているが、[3] その最も主要な動機となったのはヒュームにおける「因果律」の「法則」としての不成立ということであった。「経験」に依存する限り、「原因」と「結果」との必然的結合をもたらすものは何も見当らない。したがってこうした結合としての「因果律」は、一つの「想像」（imagination）の産物にすぎないとヒュームは主張したのである。[4] しかしこの法則を否定することは、当時興隆し確かな地歩を築きつつあった「自然科学」を否定することにつながる。この危機感がカントを駆り立てた。そして彼はヒュームの発想を逆転し、「経験」を成立させる主要な要件は「感官」の外的刺激に由来する「感覚」（Empfindung）ではなく、むしろ私たち自身の側に備わる不動の「枠組み」であると考えるに至った。この「枠組み」が「形式」（Form）とか「カテゴリー」（Kategorie）と呼ばれて、その出自を私たちの「認識能力」（Erkenntnisvermögen）[5] に負い、その「感覚」への適用によって「経験」は成り立ち、こうしてはじめて「経験」は気紛れな任意性を免れ「必然的」（notwendig）なも

のたりうるとされる。そしてこのことがカントにとっていかに基本的で重要な事柄であったかは、それが「純粋理性批判」「序文」(Vorrede)の中心主題を構成していることからも明らかであろう。

それはすなわち以下である。「対象(Gegenstand)あるいは経験(Erfahrung)――といっても、対象(与えられた対象〔gegebener Gegenstand〕としての)は経験においてのみ認識(erkennen)されるのだから結局は同じことになるが、要するに対象あるいは経験が、これらの概念(Begriff)にしたがって規定されると想定すれば、私は問題をもっと楽に解決する方法があることを、直ちに知るのである」(傍点原文ゲシュペルト)[6] またそれはさらに端的に「我々が物(Ding)をア・プリオリに認識するのは、我々がこれらの物の中へ自分で投げ入れた(legen)ところのものだけである」[7] と述べられている。

そしてこれこそがまさに、カントの思考上の革命すなわち「コペルニクス的転回」と呼ばれるものであり、その次第はカント自身によってつぎのように語られる。「それだから天体運行の主要法則(Zentralgesetz)は、コペルニクスが初め仮説(Hypothese)としてのみ想定したところのものに十分な確実性(Gewißheit)を与え、またそれと同時に、宇宙全体を結合している見えざる力(unsichtbare Kraft)(ニュートンの引力)の存在をも証明した。この力は、コペルニクスが彼の観察した運動(Bewegung)を、常識には反するがしかし確かに正しい仕方(wahre Art)で、天体(Gegenstad des Himmels)のうちにではなくて天体の観察者(Zuschauer)のうちに求めることを敢えてしなかったならば、永久に発見(entdecken)されずにしまったであろう」(傍点原文ゲシュペルト)[8]

こうしてカントはともかく、ガリレイ(Galilei)に発する新しい学としての「自然科学」に確実不動な場を提供しえたと考えたのであった。

2

さて、以上のような「序文」に示された意図は当然本文に反映されざるをえないが、その最も代表的な箇所としては「演繹論」(Deduktion)が屈指のものであろう。なぜならそれはとりわけて、私たちの「認識能力」の側の「枠組み」としての「純粋悟性概念」(reiner Verstandesbegriff)すなわち「カテゴリー」(Kategorie)が、「どうして対象(Objekt)に関係(beziehen)しうるのか」[9] ということをまさに問題とするからである。

そしてこれが「純粋理性批判」を支えるいかに重要なテーマであったかということは、この箇所が本文中唯一完全な書き改めを余儀なくさせられていることによっても明らかであろう。しかも興味深いことに、この主題を支えるさきに見た「序文」も完全な書き直しの中に置かれている。この長大な書物において、全面的書き換えを迫られたものはこの二箇所を措いて他にない。このことは何を意味するのか。種々の推測が可能でもあろうが、まず何よりもカントは自らの意図が奈辺にあるかを鮮明にしたかったのに違いない。多様な側面をもつこの著作の一応の完成とその通覧の中で、誤解を防ぐためにどこが最も主要であるかを改めて印づける必要を感じたのでもあろう。そしてこのように見る限り、「純粋理性批判」の成否はまさにこの箇所にかけられていたと言って過言であるまい。そこでその内容についての検討が当然つぎの課題となるが、はじめに述べたように私たちの究極の目標はそこに置かれているわけではないのであるから、詳細な論述は避け、極力その要点の提示にのみとどめることにしたい。

ここで特徴的なことは、「認識能力」すなわち「悟性」(Verstand)の側が「統覚」(Apperzeption)という形において示され、それに対して「対象」ないし「感性」(Sinnlichkeit)の側が「多様なもの」(Mannigfaltiges)ないし「多様性」(Mannigfaltigkeit)として示されていることであろう。

ところで「悟性」と「感性」との対峙的関係、

そして「感性」と「対象」との関係については、「感性によって我々に対象が与えられ(gegeben)、また悟性によってこの対象が思惟される(gedacht)」[10]、「悟性」と「統覚」との関係については、「最高の純粋な悟性認識(Verstandeserkenntnis)、換言すれば悟性(Verstand)の自余一切の根底に存する悟性認識が、すなわち統覚(Apperzeption)の根源的、綜合的統一(synthetische Einheit)の原則なのである」(傍点原文ゲシュペルト)[11]などがその代表的なものとして挙げられよう。また「多様なもの」ないし「多様性」が「感性」の側に帰属する点については、「感性的直観(sinnliche Anschauung)において与えられた多様なもの」[12]、「感性的直観の多様なもの」[13]のように、両者がほとんど一体のものとして取り扱われていることによってもおのずと明らかである。その他「直観」(Anschauung)と「感性」との即応についての記述は数多くあるが、「直観は感性的(sinnlich)以外のものではありえない」[14]、「我々に可能な(möglich)直観はすべて感性的である」[15]などから判明なように、「直観」は「感性」を抜きにしては存立しえないものと見なされている。

さてカント特有の用語などについての補足説明はそれくらいにして、本題へと立ち帰ろう。「演繹論」の主眼はさきにも見たように、帰するところいかにして「主体」(Subjekt)が「客体」(Objekt)に関係しうるのかという問題であった。しかしながらこの人間にとって最も本質的な事柄は、「主観」の側に「統覚」が「客観」の側に「多様」があてられた時点において、すでに決着がつけられているのではあるまいか。「対象」の側は「無」ではないにしてもただの無秩序な雑多であり、「統覚」の綜合統一のもとに置かれてこそ何ものかでありうる。したがってここでは当然、「対象」ないし「客観」を成立させるのはかえって「主観」ないし「認識能力」の側であるという逆転が生じることになろう。実際その通りなのであり、その次第は以下のカント自身の陳述に示されている。

「統覚の先験的統一(transzendentale Einheit der Apperzeption)は、直観(Anschauung)において与えられたあらゆる多様なもの(Mannigfaltiges)を結合して(vereinigen)、客観すなわち対象(Objekt)とするところのものである。それだからこの統一は客観的(objektiv)と呼ばれ、意識(Bewußtsein)の主観的(subjektiv)統一から区別されねばならない」(傍点原文ゲシュペルト)[16]ここでは「客観性」の保証が明確に「統覚」すなわち「主観」の側に求められ、また「感性的直観(sinnliche Anschauung)において与えられた多様なもの(Mannigfaltiges)の統覚による綜合的統一(synthetische Einheit)を、我々(人間)の直観の一切の対象(Gegenstand)が必然的に(notwendigerweise)従わねばならぬ条件(Bedingung)と考えることができる」(傍点原文ゲシュペルト)[17]においては、さらに「統覚」の「綜合的統一」こそが「対象」成立の必然的条件であると強調される。そしてこれらすべては、「それだから私の認識(Erkenntnis)に属すべき一切のもの、従っておよそ私にとって(für mich)対象(Gegenstand)となりうる一切のものは、すべてこの先験的統覚に従っているのである」[18]という主張に集約されよう。

ところで予想されたようにたしかにここには、カント「コペルニクス的転回」の意味するところについて一つの説明が与えられてはいるかもしれない。しかしこれは果して一つの大きな問いに対する答えであり、解決であると言えるだろうか。主客の二項対立的な関係は、ここでは「客観」を「主観」の中へと解消することによってその関係を解かれている。言い換えるならば、両者の「関係」が否定されることにおいて両者の「一致」が主張される。このように問題自身がすでにすり代えられているのであれば、解答は成立しえないし、また成立したとしても無意味であろう。いや、もともと相対峙する二項さえもなく一項だけが残されていたというのなら、問題そのものが初めから存在しなかったと言う方がより適切なのかもしれない。実際それはさきに見たように「主観」の側が「統覚」

として、それに対し「対象」の側がただの「多様」として規定された時に、すべて予定されていたことであったに違いない。ここにはすでに「主観」の側の理由のない先立がある。しかもそれはほとんど疑問を抱かれることもなく、あたかも自明の事柄のようにして提示されているのである。その結果ここに出現するのは、「客観」ないし「対象」の側に一歩も踏み出ることのない、「主観」の側だけで囲い込まれ閉ざされた一つの「世界」であろう。そこでは「客観」の側は完全に受動的な「多様」として、残像のようなはかない影をわずかに漂わすのみにすぎない。

以上よりして、ここに見出せるのは一つの循環であり、それは「認識能力」すなわち「主観」の側が、「対象」の側に対して無前提的に優先されたことによる。この先立自体一度も疑われることはなかったし、実際「演繹論」は一方を「統覚」とし他方をただの「多様」と規定することから説き起されたのでもあった。ここには「前提」における「結論」の先取が見て取れる。要するにそこにははじめから二項対立は存在せず、厳密には一項にしか視点は向けられていない。すなわちそれは「認識能力」、「悟性」(Verstand)ないし「理性」(Vernunft)の側に対してであり、換言すれば徹頭徹尾私たち「主観」の側に対してであって「対象」または「客観」の側に対してではないのである。

かくて多大の労苦の果てに私たちの手元には、結局「認識能力」だけが、中でもその究極のかたちで示すならば「理性」だけが残される次第となる。しかもそれ自身一度たりとも糾問されることなく、手つかずのままで。そしてもしそうであるとしたら「コペルニクス的転回」も、したがって「自然科学」の意味も、カントの意図を越えて変化せざるをえないことになろう。いやむしろカントの思索自体が彼の思いとは別に、すでにより深いところに到達していたと言うべきなのかもしれない。カントが掘り当てたこの箇所は、「人間」というものの究極の一点にまでつながっているのかもしれない。だがそのためには、私たちはこの著作のさらに奥深くにまで分け入る必要があろう。

3

さて以上のように見てきて、人はけげんな思いを抱くやもしれぬ。「純粋理性批判」はその名の示す通り、「理性」に対する批判ではないのか、最終的に「理性」が残されるというのは余りにも事態とかけ離れすぎてはいないかと。たしかにこの複雑な構成の書物は一面において、この疑問がもっともであることを示してもいる。カントはその「序文」においてつぎのように述べる。「私がここに言うところの批判(Kritik)は、書物や体系の批判ではなくて、理性(Vernunft)が一切の経験にかかわりなく(unabhängig von aller Erfahrung)達得(streben)しようとするあらゆる認識(Erkenntnis)に関して、理性能力(Vernuftvermögen)一般を批判することである」(傍点筆者)[19]

この点について論ずるに当り前もって注意しておかねばならないのは、ここにいわゆる「経験」(Erfahrung)が明らかに「対象」(Gegenstand)の側を指し示す点である。それは多くの箇所に見て取ることができるが、ここでその一、二を挙げれば「対象(Gegenstand)あるいは経験(Erfahrung)——といっても、対象(与えられた対象としての)は経験においてのみ認識されるのだから結局は同じことになるが、要するに対象あるいは経験が……」[20]、「経験一般の可能性の条件は、同時に経験の対象(Gegenstand der Erfahrung)の可能性の条件である」[21]などであり、これらにおいては「経験」と「対象」とがほとんど同一視されていることが明らかであろう。

さて以上を考慮してさきの問題に帰れば、「理性」(Vernunft)には「経験」を、したがって「対象」を超え出ようとする執拗な傾向があることが示唆されているのであって、それはstrebenというドイツ語自身に実に的確に表現されてもいる。そしてこのことは「人間理性は可能的経験(mögliche Erfahrung)の限界

（Grenze）を超出（überschreiten）しようとする自然的な傾向（natürlicher Hang）をもつ」[22]と言われた時にさらに明確に裏付けられ、「理性概念は単なる理念（Idee）であるから、もちろんいかなる経験（Erfahrung）の中にもその対象（Gegenstand）をもつものでない」[23]という言明において総括されよう。

つまり「理性」は他から切り離され、それ自体で見られる時は本来「超越的」(transzendent）なのであり、このような理性使用こそが「仮象」（Schein）の源泉であるとカントは考える。「先験的仮象（transzendentaler Schein）は批判（Kritik）の警告（Warnung）を一切無視して、カテゴリーの経験的使用（empirischer Gebrauch der Kategorien）の彼方に我々を運び去るのである」[24]そしてそれが人間にとって本来的で容易に解消しがたい点については「先験的仮象は、それが仮象であることがすでに発見され、またそれの取るに足りないもの（Nichtigkeit）であることが先験的批判によって明らかに見抜かれても、それにも拘らず依然として（gleichwohl）仮象たることをやめないのである」（傍点筆者）[25]と言われ、それは主に「可能的経験の限界を超出する」のが「理性」の「自然的傾向」と規定されたこととまことによく呼応するであろう。

要するにここには人間に特有の「理性」が「対象」を無視し、「経験」の領界を超えてどこまでもさ迷い出、ついには「迷妄」に至らざるをえない本性をもつことが指摘されているのであり、このことに気づいた者はその全存在を賭けて堅固な地盤を見出し、自らをそこに繋ぎ留めたいと願わずにはいられないであろう。そのように見てくると「純粋理性批判」はたしかに、一方においてこのような危機感からもたらされたものであると言って過言ではない。そして人間本性について多少ともこのような見通しを持った者に、当時達成されつつあった同じ本性に由来する「科学」の業績はいかに輝かしいものに映ったことであろう。したがってこれこそがカントを著作へと駆り立てた主要な動機であったと推測される。一方に人間理性への一抹の疑念を抱きながらも、他方にそれがもたらした実りが疑いもなく実在するということ――それは大きな希望でもあったに違いない。したがって「純粋理性批判」の成功は、なかんずく「演繹論」を中心とする主題の成功は、決して大げさでなく全人類の悲願達成を、そしてその救済をさえ志向していたと言うことができる。もしこの著作によって「理性」の王道が切り開かれえたなら、私たちは自信に満ち意気揚々とこの広大な道を歩み続けることができたであろう。

しかし、残念ながらそれが成功しえなかったことはすでに見た通りである。本来「経験」ないし「対象」を超出しようとするものを、そこへと繋ぎ留めるのは容易なことではない。いやむしろ不可能と言った方がより適切であろう。「経験」や「対象」からもともと無関係なものが、どうしてそれらと結びつかなければならないのか、その必然性をどこにも見出しえようがないからである。

かくてこのことを主題とした「演繹論」は、結局「認識能力」、ここでの表現で言えば「理性」の側の無前提的優位を主張したにとどまらざるをえなかった。カントは結果として、自らの最も避けたかったところに落ち込んでしまったのである。いや自身が覚えた危機そのものに、不覚にも足をすくわれてしまったと言う方が一そう適切でもあろうか。このことは逆に「理性」の先立が人間にとっていかに本性的であり、剥離しがたいものであるかを示してもいよう。したがってはじめから「理性」のみが立てられ、当然の結果としてそれだけが残された。

さてここまできて改めて気づくことは、この「理性」の理由のない先立こそが「理性」と「対象」との、さらに言えば「主観」と「客観」との決定的分離をも生ぜしめる原因ではなかったかということである。これらは同じ一つの事柄の表裏を形成しているのであり、主客の結合と統一は一方の側の絶対的優位が除去されない限り成り立ちえないに相違ない。だがそれが人間にとっていかに困難なことであるかを、カン

トは皮肉にも身を以て示す次第となった。さきに見たように、彼は一方において「理性」の「対象」から遊離しようとする執拗な傾向に気づいてもいただけに、それは一そうのことであったと言いえよう。その突きつける課題は余りにも大きく重いと言わなければならない。

そしてそのことはまた、カントの時代から二百年を経たいま、「科学」とは何かについて新たな問いが投げかけられていることをも示すであろう。その輝やかしい曙光の中にいたカントと異なり、それは別の読み解きを私たちに要求しているに違いない。そしてその鍵もまたカント自身の中に蔵されていることが、さきに述べられたところから推察されるのである。

こうしてここに、カントにおいて終始消極的な意味しか与えられてこなかった「弁証論」が、より積極的なかたちで浮上してくることになる。なぜなら前述のようにあらゆる労多い試みにもかかわらず、最終的に手元に残されたのは「理性」だけであるからであり、「弁証論」は「仮象の論理学」（Logik des Scheins）[26]と呼ばれており、「仮象」とはさきに見たように、「対象」や「経験」など他の一切から切り離された「理性」、換言すれば理性そのものにかかわるものと見なされるからである。またこの点についてはつぎのようなカント自身の見解も参考となろう。「純粋理性（reine Vernunft）のかかる最高原理から生ずる原則は、およそ現象（Erscheinung）に関してはいずれも超越的（transzendent）原則ということになるだろう。換言すれば、この最高原理に完全に適合するような経験的使用は、かかる原理についてはまったく不可能であろう」（傍点原文ゲシュペルト）[27]なおここで「現象」（Erscheinung）と言われているものは、その文脈からも判明なように「対象」ないし「経験」の側を指すことは言うまでもない。

4

「弁証論」すなわちカントのいわゆる「先験的弁証論」（Die transzendentale Dialektik）は、「純粋理性批判」の後半部に位置し、さきに触れたように「仮象の論理学」として表面上消極的意味しかになわされていないが、それは逆に言えば、その前半部とくに「演繹論」を中心とする部分が、カントにとっていかに大切であったかを如実に示すものとも言えよう。「弁証論」はまた「弁証的仮象の批判」（Kritik des dialektischen Scheins）[28]と規定され、「悟性（Verstand）および理性（Vernunft）のその超自然的使用（hyperphysicher Gebrauch）に関する批判」（傍点筆者）[29]と定義される。そしてこのことはさらに、「先験的弁証論は超越的判断（transzendentes Urteil）の仮象をあばき（aufdecken）、またそれと同時に仮象が欺く（betrügen）のを防ぐ（verhüten）」（傍点筆者）[30]と言われたこととも関連する。すなわち「弁証論」はもともと、「認識能力」の適用を「経験」の枠内に限定するための防禦措置として設定されたものであり、もしその限界がおかされると、どんな不都合が生じるかを論じようとしたものであった。したがってこれは言ってみれば、搦手（からめて）から主説の守りを固める役割を果すべきはずのものであった。

しかしすでに見たように、「演繹論」を中心とする主説自体が「主観」ないし「理性」の側の優位と先立の上に築かれ、「対象」ないし「経験」との結合の必然性をもたないことが判明になった以上、そうしたものの桎梏から解き放たれた「理性」そのものを主題とする「弁証論」は、新たな意味を以て甦らざるをえない。そしてこの「理性」こそあらゆるものを透過して、究極に私たちの手元に残されたものであった。カントの苦闘の中から克服しがたい生地として、このものはいかなる制圧にも屈することなく浮上する。それは逆にこのものがいかに私たちにとって本性的であるかを証明することでもあろう。「仮象」や「迷妄」の中へいく度押し込められようと、遅かれ早かれこのものはその枠を喰い破り、その出自の正当性を声高に主張し始めるに違いない。そしてその時私たちは、「弁証論」が遠慮がちに羽織った衣を透かして自らの本質と真向から向き合うことになるであろう。

そしてこのように見る時私たちは、「純粋理性批判」の後半部を形成する「弁証論」の、前半の主説に対するその分量の多さに改めて気づかされる。一般に通常の書物では後半が結論を含む主要な部分であり、そこに力点が置かれ、当然分量的にも優位を占める場合が多いが、その内容の詳細を知ることなくこの著作に接するものは、そうした観点から、あるいは「弁証論」をその中心的所説と見誤るかもしれない。そしてこのこと自体単に表層的問題を越えて、何か本質的な事柄を指し示してもいるように見える。

さてそこでここに改めて浮上してくるのは、さきに挙げた「理性が一切の経験にかかわりなく達得しようとするあらゆる認識」、[31]「人間理性は可能的経験の限界を超出しようとする自然的な傾向をもつ」、[32]「理性概念は単なる理念であるから、もちろんいかなる経験の中にもその対象をもつものでない」[33]等々のカント自身の言葉である。これらすべては「理性」の本性についての言及であり、それはしたがってここにそのままのかたちでの承認を要求することになるであろう。そして「弁証論」はこのような「理性」についての論述であり、それは取りも直さず人間本質についての考察であるということになろう。

ところで「先験的弁証論」は、カント特有の建築学的性癖も手伝い三部に分たれる。すなわち「理性」の(1)主観に対する関係（Verhältnis zum Subjekt）、(2)現象における多様な客観に対する（zum Mannigfaltigen des Objekts in der Erscheinung）関係、(3)あらゆる物一般に対する（zu allen Dingen überhaupt）関係がそれである。[34]そしてそのそれぞれが「先験的心理学」（理性的心理学）、「先験的宇宙論」（理性的宇宙論）、「先験的神認識」（先験的神学）に即応するものとされるが、[35]これら三つのうち、私たちの目下の目的にとって最も有意義と思えるのは第二のものであろう。なぜなら、そこにおいては「現象における多様な客観」が問題とされ、それへの「関係」が主題とされている以上、そこにはまさにさきに見た「演繹論」を中心とするカントの基本的所説との密接なかかわりが予想されるからである。なおここではじめて「世界」（Welt）という概念が提示され、それは同時に「自然」（Natur）とも呼ばれる。[36]このことは「演繹論」の枠組みをさらに広げて、一そう明確に私たちと「外界」との関係を示唆するものと言うことができよう。そしてこれが人間が生きることにおいて、最も基本的な事柄であることは言を俟たない。第二のものをとりわけて重視する所以である。

しかしながらこの主要な第二の場合において、事態は二つに引き裂かれたかたちで出現する。カントはこれを「アンチノミー」（Antinomie）と呼び、また「矛盾対立」（Widerstreit）とも呼ぶのであるが、[37]そこには相対峙する両項がともに等しい力で拮抗するさまが暗示されているのであるから、「二律背反」という言葉が訳語としては最もよく適合するであろう。そしてこれら「アンチノミー」についても建築学的構築が試みられ、「量」（Quantität）、「性質」（Qualität）、「関係」（Relation）とりわけ「原因性」（Kausalität）、「様態」（Modalität）とりわけ「必然性」（Notwendigkeit）のそれぞれの「カテゴリー」（Kategorie）に添うかたちで、四つの対立が提示される。

しかし真の意味で二項が対等に拮抗するのは、カントが「数学的」（mathematisch）と呼んで「力学的」（dynamisch）なそれ、すなわち「関係」および「様態」のそれから区別した、「量」および「性質」の「カテゴリー」[38]に即応する「アンチノミー」だけであると思われる。なぜなら「力学的アンチノミー」については、対立する両項のそれぞれへの視点の転換によって「ともに真（wahr）でありうる」と言われているのであるから、[39]これらは矛盾対当を本性とする「アンチノミー」の趣意によく添うものとは思えないからである。したがってここでは「アンチノミー」の典型として、「量」および「性質」の「カテゴリー」にかかわる「数学的アンチノミー」の場合のみを提示することにする。

さてそこで第一のそれすなわち「量のカテゴ

リー」に関する「アンチノミー」では、「正命題（定立）」（Thesis）として「世界（Welt）は時間（Zeit）において始まり（Anfang）をもち、また空間（Raum）において限界（Grenze）をもつ」、「反対命題（反定立）」（Antithesis）として「世界は時間的にも始まりをもたないし、空間的にも限界をもたない、すなわち世界は時間的にも空間的にも無限（unendlich）である」が主張され、[10] 第二のそれすなわち「性質のカテゴリー」に関するものでは、「正命題」として「世界においては、合成された実体（zusammengesetzte Substanz）はすべて単純な部分（einfacher Teil）から成っている、また世界には単純なもの（Einfaches）か、さもなければ単純なものから成る合成物しか実在（existieren）しない」、「反対命題」としては「世界におけるいかなる合成物も単純な部分から成るものではない、また世界には、およそ単純なものはまったく実在しない」が挙げられている。[11]

カント自身の構成にしたがい叙述がやや煩瑣となったが、私たちに必要なことはそのような形式面に拘泥することではあるまい。要はその内容であり、そこでいかなることが主張されようとしたかということであろう。そしてその点において注目すべきは、言うまでもなくここには相対立する命題が、同時に提示され、償いがたい矛盾が露呈している点である。これは何を意味するのか。そのことについて考察をはかるためには、とにかく上述の「アンチノミー」の内容がまず検討される必要があろう。

さてそれぞれの「正命題」は「世界は時間的な始まりをもち、また空間的にも限界をもつ」、「世界においては、合成された実体はすべて単純なものから成っている、また世界には単純なものか、さもなければ単純なものから成る合成物しか実在しない」であるが、これら両者には密接な関連が認められる。それを要約すれば「世界」には何らかの「発端」があるということであり、それは換言するならば、「究極の何ものか」が「実在」するということであろう。それに対し「反対命題」は「世界は時間的な始まりをもたないし、また空間的な限界ももたない、すなわち世界は時間的にも空間的にも無限である」、「世界におけるいかなる合成物も単純な部分から成るものではない、また世界には、およそ単純なものはまったく実在しない」であり、これら両者に特徴的なことは、「究極なもの」が実在しないことによって「世界」が「無限」へと拡散する次第であろう。

ではこのような矛盾分裂を生ぜしめるものは、一たい何なのであろうか。この拮抗対立の原因をどこに求めればよいのか。それについては、以下のカント自身の言葉が一つの手がかりを与えてくれよう。すなわち「我々は反対命題（Antithesis）の主張を通じて、その考え方（Denkungsart）がまったく一様（vollkommene Gleichförmigkeit）であり、またその格律（Maxime）が完全に一致（völlige Einheit）していることを認めうる、すなわちそれは純粋経験論（Empirismus）の原理（Prinzipium）である、そしてこの原理は世界（Welt）における現象（Erscheinung）の説明（Erklärung）においてだけでなく、世界そのもの（Weltall selbst）の先験的理念（transzendentale Idee）の解決においてもまた認められる。これに反して正命題（Thesis）の主張は、現象の系列内における経験的な説明方法（empirische Erklärungsart）のほかに、知性的な起源（intellektuelle Anfänge）を根拠とするものであり、その限りにおいて格律もまた一通りではない」（傍点原文ゲシュペルト）[12]

ここでは「反対命題」が「経験」の側、すなわち「対象」の側にかかわり、「正命題」は逆に「知性」の側、すなわち私たち「認識主体」の側、換言すれば「主観」の側にかかわることが示唆されている。つまり正反それぞれの命題は主・客関係の中でこそ出現するのであり、その拮抗対立はほかならぬ主・客間のそれを写し出しているということになるであろう。

ところでこれを前に述べたことと関連させれば、「正命題」は「主観」の側の単一と統一に基づく世界像を、「反対命題」はそれに対し「対

象」の側の無規定できりもなく分散したそれを表わすことになろう。すなわち一方の側には「一」があり、他方には完全な無秩序と「多」があるのみであるが、これらが「関係」であることを念頭に置けばこれはどんな意味をもつのか。それは明らかに前者の側の無前提的先立と優位を示すにほかなるまい。その意味で「正命題」の中で用いられた「始まり」（Anfang）とか「単純なもの」（Einfaches）という言葉は、きわめて象徴的と言えるであろう。それらはすべてがそこから始まったことを端的に物語るからである。しかもそのこと自体には何の理由も設けられているわけではなく、単なる先取りということにすぎない。そしてこの一方の側の先立こそが、他方の側に限界のない拡散と不統一とをもたらす結果となる。これらは「関係」である以上、鏡の表裏のように一体となって一つの事柄を支えているのである。

ここで私たちは直ちに、こうしたことが余りにも「演繹論」の場合と似かよっていることに気づくであろう。たしかにその通りであり、相対立する両命題はまさに「統覚」と「多様」とに即応すると言うことができる。そしてそこには言うまでもなく「統覚」の側の先立があった次第については、すでに言及した通りである。

ところでここで注意すべきは、正・反両命題ともに「仮象」（Schein）と見なされている点であろう。「経験」ないし「対象」の側から解き放たれ独り歩きを始めた「理性」は、どう動こうとも「仮象」を生むよりほかないことは、「弁証論」が「仮象の論理学」と名付けられた時から予定されていたことでもあるが、[13] カントのつぎの言葉はそのことをさらに確証する。「数学的アンチノミーは、相反する二つの弁証的主張（beide dialektischen Gegenbehauptungen）をともに偽（falsch）であると論定せざるをえなかった」[14]

こうしてすべては「偽」の中へと解消されるが、中でも最も問わるべきは、「主観」の側の無前提的優位ということであるに違いない。なぜならさきに見たように、それがすべての「発端」であり、他方において無限への拡散を招来したのもこのものにほかならないと言いうるからである。したがってあの償いがたい矛盾分裂を以て示された「アンチノミー」自体、そこに由来をもつ。そのことはまた同時に主・客関係という対立的関係の出自が、どこに求められなければならないかをも明確に示すことになろう。そしてその点については、すでに3の後半部において予想されていたのでもあった。

さらにここにはまた、さきに「演繹論」において提示された「主観」の優位によって囲い込まれた自閉空間の中で、何が生ずるかが示される。それはこの閉ざされた世界が出現する以前の事情を僅かに両極というかたちに反映しつつ、その間を投げては返されながら、迷妄と夢幻のあわいをさすらいゆく姿であろう。二つに引き裂かれた「アンチノミー」は、そのことを如実に写し出している。

なおここで注意すべきは、前述のように正反両命題がともに「偽」（falsch）とされている点であろう。すなわち「対象」の側の無限拡散は言うに及ばず、その原因となった「主観」の側の無前提的先立と優位もまた、明確に「偽」であり誤りであるとされているのである。ここにきて私たちは「弁証論」を支え、「演繹論」の本質をあばき俎上に載せたものが何であったかを改めて知る。この究極の一点はすでに「純粋理性批判」の立場を超え、つぎの地平へと展望を開くものに相違ない。

5

さて以上を通じて明らかになったことは、「演繹論」と「弁証論」との密接な連関であろう。しかもこれら両者のかかわりは、カントの意図を越えて極めて積極的であることが読み取れる。すなわち「弁証論」は「演繹論」の問題点を提示すると同時に、その意味を解く。換言すれば、この著作の後半部を占める「弁証論」はそれ自体、「演繹論」を中心とする前半部の一つの「批判」を構成していると言ってもいいのであり、そこには明らかに意識の深化を見て

取ることができる。そしてこの意識の深化は、前半部の主題を「アンチノミー」に托して笑劇化、戯画化しているとも言えるのであって、自らの中心的所説の骨格をなすあの「コペルニクス的転回」をも、高い立場に立ってシニカルな視点のもとに置くことになるであろう。カントは気づかずして実際は自らの所説をすでに超え出ているのであり、これは極めて重要なことのように思える。なぜなら「純粋理性批判」は文字通り人間本質への批判として、新たな意味付けを与えられる可能性をもつことになるからである。そしてこのように見る限り、「弁証論」はその見掛け通り、この著作の「結論部」として至当な位置を回復するに違いない。

要するに「弁証論」は私たち人間の基本的在り方を、余計な夾雑物を剥ぎとり、ほとんど図式的とも言える簡明さと直截性とを以て呈示してくれる。そしてそこに映し出されるのは、「主観」の側、「理性」の側、すなわち「人間」の側の理由のない優先であり、そこから必然的に帰結する「客観」の側、「対象」の側の蔑視である。いや主客関係自体がむしろそこからもたらされているのであり、一方が「主」他方が「客」と見なされている点に、おのずからそのことは見て取れるであろう。それゆえにこの「関係」の特色とするところは当然、償いがたい分裂と分極であり、これが人間を解きえようのない難問と絶えざる試練の中へ放置する。カント自身ですらその例外でありえなかったのだが、人間は自身が仕掛けた罠の中に自ら捕えられ懸命に出口を求めて模索するが、そこに出現するものは絶えざる「仮象」であり幻影であるにすぎない。「自己」の側の無前提的先立と優位は「他者」の把捉を不可能とするのは無論のこと、「自己」自身をも見失わせる結果となる。

ところでこの「弁証論」において剔出された「人間」への究極の見方が、同時に前述のようにいわゆる「コペルニクス的転回」に由来する「演繹論」などの主要所説への「批判」と見なされる限り、「科学」もまた相対的観点のもとに置かれざるをえないであろう。なぜなら初めに述べたように、これらは「自然科学」を基礎づけその確実性を保証するためにこそ企てられてきたのだからである。

このことは裏を返せば、「科学」は「人間」の本質的枠組みに深くかかわり、その中から生れるべくして生れ出たということを示すであろう。それが人間中心、人間重視の時代の到来まで出現しえなかった経緯もその意味で十分にうなずける。それは「人間」の基本的在り方の模式の上に築かれた必然的様態であったことを、カントは私たちの前に提示したと言える。そしてここまできて私たちは改めて、すべてはあの「コペルニクス的転回」にこそ由来するものであったことを知る。あの偉大な「発見」は、発見された時から自身を超え、自身を「批判」へとさらす種子をすでに胚胎していたのである。それはまさに「科学」の「秘密」の暴露であり、それはすなわち「人間」の深奥に潜む究極的構造の暴露でもあった。カントの視点はそれゆえに自身の生きた時代を超え、遥かに私たちの足元にまで届いている。いやむしろあれから二百年を経て、その所説はいよいよ重く私たちの上に懸けられていると言うべきなのであろう。

ゴロソフケル氏の著作を機縁に、私はカント「純粋理性批判」を改めて読み直してみようと思いたったのであるが、この巨大な著作に対し自らの力の及びがたいことを知らされるばかりであった。しかしささやかな考察の後で、この大著中とりわけて「アンチノミー」に着眼した氏の慧眼に改めて敬意を表さざるをえない。それはこの箇所が「人間」について考える上で、この上もない素材を提供しえているからである。しかもそれは余分なものを削ぎ落し、最上の見本のようなかたちで以て私たちの前に示される。これが果してゴロソフケル氏の言うように、「人間」の基底の闇にまで迫ろうとした、あのドストエフスキーの代表作の真のモデルであったかどうかは別としても、時代と場所と資質とを異にしながらの両作品の酷似は、何か戦慄に似たものを呼び起さずにはおかない。

〔註〕

(1) ゴロソフケル「ドストエフスキーとカント」(みすず書房)

(2) 「ドストエフスキーがカントを知っていることの裏づけとして、読者は作家の伝記研究に頼る必要すらない。小説のテキストと『純粋理性批判』のテキスト——これが確実な証人である」(上掲書 66頁)

(3) Prolegomena, Vorrede.

(4) Hume : A Treatise of Human Nature, Book I.

(5) これは「悟性」(Verstand) ないし「理性」(Vernunft) と呼ばれるが、カントにおいて両者の区別は必ずしも明確でない。ただこれらの能力の「経験」への適応に限って言えば、「悟性」と呼ばれる場合が多いようである。

(6) K.d.r.V., XVII.
以下特別の表記がない場合は、B版(第二版)の頁付けによる。

(7) ibid., XVIII.

(8) ibid., XXII.

(9) ibid., 117.

(10) ibid., 29.

(11) ibid., 137.

(12) ibid., 143.

(13) ibid., 150.

(14) ibid., 75.

(15) ibid., 146.

(16) ibid., 139.

(17) ibid., 150.

(18) ibid., 220.

(19) ibid. Ausgabe A, XII.

(20) ibid., XVII.

(21) ibid., 197.

(22) ibid., 670.

(23) ibid., 799.

(24) ibid., 352.

(25) ibid., 353.

(26) ibid., 349.

(27) ibid., 365.

(28) ibid., 88.

(29) ibid., 88.

(30) ibid., 354.

(31) ibid. Ausgabe A, XII.

(32) ibid., 670.

(33) ibid., 799.

(34) ibid., 391.

(35) ibid., 391.

(36) ibid., 446.

(37) ibid., 434.

(38) ibid., 110.

(39) ibid., 559-560.

「力学的系列における条件付きのものは、現象としての系列からは分離せられえないが、それにも拘らずなるほど経験的に無条件的ではあるがしかし非感性的な(nichtsinnlich) 条件と結びついて、一方では悟性(Verstand) に、また他方では理性 (Vernunft) に満足を与えようとするのである。要するに力学的アンチノミーの場合には、単なる無条件的全体性をどんな仕方でか求めようとする弁証的論証は覆えされるが、その代りにいま述べたような仕方で是正された二つの理性命題は共に真でありうるという結果が生じるのである」(傍点原文ゲシュペルト)

(40) ibid., 454.455.

(41) ibid., 462.463.

(42) ibid., 493-494.

(43) ibid., 170.349.

(44) ibid., 559.